

馬場あき子百首

米川千嘉子 選



馬場あき子

忘れねば空の夢ともいいおかん風のゆくえに萩は打ち伏す

みしことのわずか光ると思うときまんじゅしゃげ明るすぎて雨ゆく

『桜花伝承』

砥ぎてもつ厨刀青き水無月や何わぎのはて妻とはよぼるる

胸乳など重たきものたゆたいに翔たざれば領す空のまぼろし

植えざれば耕さざれば生まざれば見つくすのみの命もつなり

折れ芦の鴨の入江に陽はさしてゆきてかえらぬものに春くる

さくら花幾春かけて老いゆかん身に水流の音ひびくなり

天死せし母のほほえみ空にみちわれに尾花の髪白みそむ

大江山桔梗刈萱吾亦紅 君がわか死われを老いしむ

国引きのころさびしや川なかの雪洲にかかり釣糸ひかる

力道風鬼なお恋しきに来てみれば伊那の春鬼雪食みており

『雪鬼華麗』

西行のさくらありわがさくらありて小さけれどもわがさくら咲く

いつかわが背後せばまりいることの見えつどつと桜咲きそむ

夜半さめて見れば夜半さえしらじらと桜散りおりとどまらざらん

麻の葉に雨降る姉といもうとの遠世がたりに朝の雨降る

冬野ゆく閑吟集こそかなしけれ声にうたえどわれは狂わぬ

幽居いてはかなき春の草もみん唐なすな大和なすな花咲く

真葛野も枯れ明るみて男には敵われには思う人ある

『ふぶき浜』

天なるや沖のかもめご地なるや白玉椿触れて別れん

捨て船と捨て船結ぶもがり縄この世ふぶけば荒寥の砂

つばめ賢し雀みにくしもろともに夕映えおりてかなしまれける

生き急ぐほどの世ならじ茶の花のおくれ咲きなる白きほろほろ

鴛鴦の思羽立つる夕照りに書かざりしこと余情のごとし

もろ抱きに稲の葉茎に居るからに愚直の心みゆるぞいなご

来し方も無念無想のさびしきとなりて吹き飛ぶ鷗ありたり

盃にあけびの花の浮かむまで酒のさびしきをきみに知るまで

歴史の時間むしろ逃れてゐたるもの無名峠の五月のさくら

月日経て苦しきものは積るらし瘤ある林檎樹花散らしをり

菊焚きし手の昂りのさりながらはや大切のものもかへらし

一羽のみ生きて哀しきふくろふの身の上問ふな木枯の森

生きてなほ一寸先の闇わたる冬夜の凍みを啼け川千鳥

人間にほほゑむといふさびしきの残されて夕晴れ来たる摩周湖

月山に太るあけびらしんしんと霧吐く口をもちてしづまる

阿賀野川ひろらに雪にひらかれて永遠より来たる水永遠にゆく

『葡萄唐草』

『晩花』

恋しきものみななくなりてしまひたる紅梅の枝の淡きかげろふ

みちのくの秋陽霧らへる最上川茂吉は老いてほほ笑まざりき

氷見の寺人はさびしき音させて飛ぶこともなき落葉を踏み

一削ぎに氷見がけづりし瘦面の頬を寒しと鳴けきりぎりす

秋の土しづかに菊を咲かしめよ天地澄むと思ふ朝なり

冬海の暗き世界のつまらなき灰色にしてなまこの眠り

あなにやしえをとめなどと言ひたりし古きこゑきこゆ朴の咲く頃

わたり来てひと夜を啼きし青葉木菟一夜は遠く啼きて今日なし

永祿四年川中島は秋深し信玄の葡萄謙信の葡萄

柿多き柿生の夕陽映え映えと赤光りの鶺鴒高枝に置く

死してのち死者老ゆるとぞ雪の夜の鏡ひらけば亡母少し老ゆ

あやまちて鬼となりみきおほろ夜のことなれば人とがめ給ふな

びしと鳴る林檎の中の雪の水全東北は雪ぞと思ふ

平泉の滅びを泣きし芭蕉より西行はややリアルに居りき

頼朝はどこにもをりてひたすらに蹶起せざれば木を植ゑてゐる

をみなごに物思ふ時間たつぷりと残されてほのか青き月の出

『雪木』

下野の芦野の柳若柳むかし知らねばさはやかに散る

物言へよ物言へよとも見てあれば遊行柳に雨後の霧たつ

辛勝も奇勝も勝ちといふ思想あな若けれどかすかに妬む

老いぬれば魂やみて臥す母の目のさくらを見ればほのかに泣けり

はやく昔になれよと心かなしみ昔の香もて梔子は咲く

つくつくほふし悔いは誰しもかなしきを紅毛ゆれてもろこし実る

月代を見むとし立てば膝さむし露しんしんと萩も倒れぬ

直情のごとき葱の香きましめに生き来し寒さ思へ静かに

石垣島万花艶ひて内くらきやまところほかすかに狂ふ

八重山悲歌俗調濃きは身にしみて夜は暗しまして夜の海はなほ

満開の花のちからに押されみて大悲のわらひほのかきくべし

つひにして山川蟬夫名乗りたるかのほほゑみも青葉しんしん

魚籠の鮒くらくしづもりゐたるかな起ちて枯野を行かむとするに

ほうたんは狂はねど百花乱るれば苦しきに似たり恋ぞかがやく

男の論かすか不可思議されどなほわがほほゑみもかすか不可思議

秋の日の水族館の幽明に悪党のごとき臙を愛す

『月華の節』

『南島』

『阿古文』

地下道をきらきらと行く長脛彦うちほろぼしてやらむと思ふ

母はもう植物なれば静かなる青き心を眼に澄ましるつ

心こそ光るにあらめ夕日映る水を走りて鴨ら遊べる

「わ男！」とわわしき女罵ればころよきかな罵るちから

かすかなるものなりければ言葉とはやはらかに花のごと咲かしめよ

祖母山に古祖母山は並びみてああ親になひ星も上れり

踊り踊るなら東京音頭痴れ痴れと半世紀何もなかりしごとく

父といふ恋の重荷に似たるもの失ひて菊は咲くべくなりぬ

風景はあはあはと眼にみちみたり面影にみる死者阿古父尉

うろこ雲亡き人かずにある父に燃えて雁来紅もさやうなら

ま清水はくほより湧きし恋が窪うらなやましく冬枯れにけり

いつこならむ目ざむれば雨こまやかに寂寥に会ふごとく停車す

えご白しあの子もこの子も嫌ひなる老いといふもの棲みてる家

老いて男は女体恋ふらし秋風にわが忘れをるわれなる女体

ふと思へばわれ情あつく愛淡きこと折ふしのあやまちなりや

女なること忘れをりしが夏たけて鯉魚たり夢に濃きやみを泳く

『暁すばる』

目高とは物そのものにあらねどもかなしきものぞ目を張りて生く

秋深きつゆのひびきに思はずもどうと落ちたる磨崖仏頭

仏頭に口髭あればおどろきてそよるにゐたり青きばつたは

蜘蛛の子はすはすは糸に乗りてゆく雪を迎へに山越えてゆく

心なし愛なし子なし人でなしなしといふこといへばきはやか

時分の花といふものいつも咲いてゐるやうな新宿の夕べのあかり

熊楠の墓に一枝桜挿し冒瀆のごと抒情曇れり

またたびに草かげろふが飛ぶ昼のしゆんしゆん青い夏の日輪

種飛ばすもの何々ぞ吾庭には鶏頭深く怒りて立てり

『飛種』

秋風は過去の索引そのなかに萩咲けば萩は思ひ出づらむ

老妓来て海鞘の小角の陰陽のしるしを教ふをかしかりけり

春近き潮とほり過ぎ蝸壺の蝸のゆめ二三本足をこぼせり

セブイレブンはつなつの灯の青きなか名もなく清く美しき若もの

三輪山に椿の磐座といふものありふと思ひまた梅雨深く忘る

月光は額に降れる淡き水しみに愛しと思へやうつしみ

恐竜展出づる酷暑の夕ぐれを尾のなき二足歩行者あはれ

鬼剣舞なむあみだぶつみちのくに古き亡者のたたかひのこる

いのち深くあたたかきところををよめこのゆめありしことしだいに忘る

歌の表記・ふりがなは原則として歌集に準拠しています。

『青椿抄』

馬場あき子は十六の歌集をもっているが、ここでは第五歌集『桜花伝承』から最新歌集までをあげた。『桜花伝承』で馬場あき子の文体は最初の完成をみせ、日本の伝統的な風景と女の哲学をむすんで、現代短歌における主題としてあざやかに提示したのだ。と、同時に、馬場の目覚ましきは、そこにとどまらず、つねに文体や風体の変化、時代を意識したおもしろさへの意図をふくみながら動こうとしたことにある。闊達なスケールの大きさと文化論の視点の面白さをもつ連作の

試み、口語やオノマトペの採用、風俗や軽みへの関心など、歌集二、三冊ごとに、その変化をききやかにたどることができる。ここでは、なるべく偏らずその多様性と変化をたどれるような選歌を心がけたが、馬場の歩みの中で原点のように変わらないのは、生き生きと弾む人間的なるものへの信頼と興味、のびやかできびきびとした韻律への好みだった。なお、『晩花』から、それまでの現代仮名遣いを歴史的仮名遣いに改めている。米川千嘉子（よねかわ・ちかこ）「かりん」会員